

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

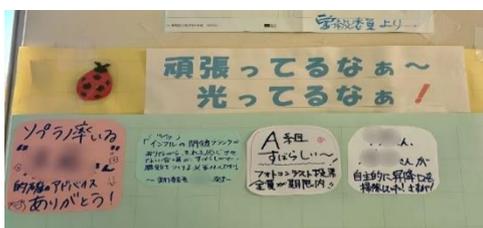
【取組1】(A・B中学校)

不登校生徒が学校行事に参加しやすいように教職員が連携し、声掛けを行って、準備を丁寧に行った。その結果、不登校生徒の多くが運動会や宿泊行事、合唱コンクールなどに参加することができた。練習への参加や事前学習など負担にならないように声掛けし、不安感を取り除くために見通しを立てて計画的に行った。運動会では不登校対応巡回教員が不登校生徒の登校状況を確認し、参加する種目のとりまとめを行うとともに学校生活支援員や特別支援部の教員と連携して支援した。その結果、生徒の参加状況や取組状況が把握でき、前向きな声掛けを周囲の生徒に働きかけたり、保護者とコミュニケーションをとりながら連携したりすることができた。

【取組2】(A・B中学校)

学校行事に向けた意気込みやメッセージの掲示など、生徒主体の活動が各教室で丁寧に行われた。頑張っている人、特に成果を出した人などに着目し、それぞれが輝く瞬間やそれに気付く温かさを育もうとする取組が見られた。

生徒朝礼の生活委員会の発表では、ふれあい月間について丁寧に説明され、生徒全員が気持ちよく学校生活を送るためにはどうすべきか考える良い機会となっていた。



【取組3】(C中学校)

音楽の授業では授業の冒頭に本時の目標を意識させ、各パートやグループごとに練習計画を立てて学習を進めた。特に、練習すべきところや意識して歌うポイントなどを話し合い、意見が共有できる場を取り入れていた。

また、演奏後には必ず教員が褒め、生徒同士も良かったところを指摘したり、拍手をし合ったりして、お互いを認め合う雰囲気の中で授業を実践した。

【取組4】(A・D中学校)

生徒対応に関わる関係機関について研修を行った。子ども家庭支援センターや学校教育支援センター、SSWの取組や連携を確認した。

不登校対応巡回教員が巡回校において不登校対応研修を実施した。校内別室の運営方針や、不登校対応の各機関、不登校対応巡回教員のできることに、区や都の取組を教職員に向けて説明することができた。校内別室の理解が進み、利用生徒も増えた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（E中学校）

毎週支援会議を実施し、支援シートを活用した情報共有や検討事項の話合いを行っている。管理職、分掌の教員、学校生活支援員、SC、SSW、不登校対応巡回教員などが参加している。不登校の要因や背景は多様であり、支援の手だてや支援の進捗を多面的に把握する重要な場となっている。

アウトリーチによる支援（D中学校）

小学校から不登校の続いている生徒の自宅に家庭訪問を行った結果、校内別室へ継続して登室することができた。当該生徒は、学習意欲も高まり、小学校の学び直しを行っている。担任と不登校対応巡回教員、福祉事務所の子ども支援員が連携して訪問し、保護者と情報共有を行いながら、継続して支援している。

校内別室における支援（A・B中学校）

不登校対応巡回教員が校内別室を利用する3年生の生徒に進路指導を行い、校内別室利用の生徒の学び直しに向けた学習支援を行った。また、必要に応じて個別面談やソーシャルスキルトレーニングの手法を生かしたグループ活動などを行い、生活で困ったことへの対処法などを支援した。生徒の状況に応じてグループ活動を取り入れ、一緒に給食を食べたり、ゲームをしたりすることも有効であった。人との関わりが苦手な生徒にとっては、校内別室を利用している生徒同士の関係の深まりや、以前よりも自己理解を深めることができるようになった。



デジタル機器を活用した支援（E中学校）

不登校生徒と学校の連絡手段として、一人1台端末により学習プラットフォームを活用した。登校時刻や体調、面談予定などを共有し、支援することができた。連絡が付きにくい家庭や、電話が苦手な生徒や保護者には有効であった。



関係機関との連携（C中学校）

学校教育支援センターによる学習支援と校内別室を併用している生徒の進路指導について、不登校対応巡回教員が学校教育支援センターの進路担当と定期的に情報共有を行った。支援・指導内容を共有し、指導の方向性を一致させることができた。

成果

巡回している5校の教職員や関係機関と連携して支援を進めることができた。校内別室に安定して登室できる生徒が増え、居場所として機能を高めることができた。

課題

更なる支援の充実のために、校内別室や不登校対応巡回教員の役割、区の支援体制などを、教職員に更に浸透させていかなければならない。